課題の具体的設定に向けた意見交換会
とりまとめ
2017.10.13　於；内海水先区水先人会会議室
出席者；赤塚、井上、片岡、斎藤、篠原、津金、原、森

《議論の進行》

事前に、理事発起人から取り上げるべき課題について意見を事務局に提出。事務局で、それらを集計、一覧表にまとめ、これを基に取り上げるべき研究課題の絞り込みのための議論を行った。

なお、この議論は研究課題候補の絞り込みであって、研究課題の決定ではない。この後、議論の結果を会員全員にメール配信し、会員からの意見を踏まえたうえで次回第４回理事会において初年度の研究課題を決定する。

《議論の内容》

統一テーマを「持続可能な海運活動と海事社会の健全な発展」とし、その下に、「海事社会に着目した課題」「海技の実務に着目した課題」「港湾の将来に着目した課題」の３つの分野を設定した。この事務局案を基に議論を進めた。

１．それぞれの分野において、最初に取り上げる研究課題、２年度以降に取り上げる研究課題に区分した。
２．また、「自律船の問題」「後継者の確保・育成の展望」については、３つの分野にまたがる課題であるためその取扱いについては今後検討する。
３．上記１．２．の合意のもと研究課題としての候補を絞り込み、３つの分野の中からそれぞれ研究課題候補を、初年度と２年度以降の課題に分けて議論した。

その結果、下記を初年度の研究課題候補とすることが合意された。

①　「便宜置籍制度の新しい展開」（海事社会に着目した課題）
②　「水先の実務業務にかかわる問題」（海技実務に着目した課題）
③　「情報活用に基づく港湾の将来展望」（港湾の将来に着目した課題）

２年度以降に取り上げるべき研究課題として下記が候補として合意された。

①　「クオリティシッピングの推進」（海事社会に着目した課題）
②　「海技のリスク・マネジメント推進」（海技実務に着目した課題）
③　「海運物流、港湾労働の新しい展望」（港湾の将来に着目した課題）

議論の過程で出た特筆すべき事項として下記がある。

①　「水先の実務業務にかかわる問題」の中には、「水先類似行為の在り方に関する問題」

「水先人の業務を海上履歴に組み込む問題」「大型クルーズ船に対する水先業務の在り方の問題」「水先人の後継者育成問題」などがあるが、どのように進めるかについては次回以降理事会で課題研究グループメンバー決定後、そのグループに委ねる。

② 「クオリティシッピングの推進」の中には「船員の Decent work」が含まれる（Decent work は、適切な水準の労働条件と社会保障を基礎にした働きがいのある人間らしい仕事という意味)。この点で問題になるのは内航海運であろうと推測されるが、「クオリティシッピング」の詳細な概念を定義しないまま「クオリティシッピング」として一括して取り上げると内航海運の労働環境については埋没してしまう可能性があるため独立して研究課題とすべきであるが、これは 2 年度以降の研究課題として取り上げることとし、内航船主へのヒアリングなど研究が進められるかどうかを森理事が検討する。

③ 「自律船」については、欧州を中心に研究が進み、日本でも注視されるようになっていることから、海事研究協議会でもその動向を注視すべきである。しかしながら、現時点ではまだその動向など不透明であり具体的な研究課題として取り上げるにはテーマが大きすぎることを含めてまだその時ではないと考えられる。ただし、重要な問題であることから状況を見ながら 2 年度以降に取り上げるかどうか別途議論する。

④ 「船長の権利と義務と責任の問題」「海洋自由の原則」「海洋安全保障」の問題なども提起されたが、海事研究協議会での研究課題とするには現状では大きすぎる。ただし、こういう意見もあったという意味で別紙の枠外に記載する。

以上

海事研究協議会事務局

『持続可能な海運活動と海事社会の健全な発展』

今は荷が重いものの、忘れてはならない問題
- **船長の責務**
- **海洋自由の原則、海洋安全保障**

海事社会に着目した課題

初年度候補 ⇒

・便宜置籍制度の新しい展開

船社ごと国ごとの競争の視点から離れて考えるとき、海事社会としてあるべき姿を見失っていはしまいか

２年度以降候補 ⇩

・クオリティシッピングの推進

日本人海技者が培ってきた働き方、知識、技術等をベースに日本の海技を日本人以外に伝承する方策の検討や将来の海陸役割分担、船員のDecent work等の観点から高質化を図ってきたか

海技実務に着目した課題

・水先の実務業務にかかわる問題

水先類似行為の在り方に関する問題、水先人の業務を海上履歴に組み込む問題、大型クルーズ船に対する水先業務の在り方の問題、水先人の後継者育成問題等に対し、自らが問題点を発掘しあるべき方向性を検討するような姿勢を積極的に示してきたか

・海技のリスク・マネジメント推進

出入港航行安全対策など船舶の航行安全に関して港湾施設を整備する側、船舶を運航する側、行政側によって取り組みが一枚岩となっていない。
海事関係者、港湾局、海保、民間がどのように意識を統一して、ガバナンスを強化するか、

港湾の将来に着目した課題

・情報活用に基づく港湾の将来展望

コンテナ・ターミナルの自動化、ターミナルにおけるAI・IoTの導入など、先進情報技術をどのように利用するか、先行する海外の取り組みにとりのこされないための検討への姿勢を見失ってはいないか

・海運物流、港湾労働の新しい展望

新しい海上輸送手段の開発、モーダルシフトの推進など、安全・経済・効率の観点から港湾や港湾活動に対し海技者はこれまで独自の考えを積極的に発信してきたか、

・自律船の問題

海技者の役割はどのように変化するか、
海運全体にわたる社会的、法律的、経済的波及との関連において検討する。
（船員教育・安全保障・責任問題・港湾機能・海賊対策・運航効率・タグ等他業界への波及）

・後継者の確保・育成の展望

海上陸上で働く海技者に期待される人材像、役割
育成、教育・訓練等のあり方について新しい展開を見据えているか